

## 絵本をもとにした子どもとの対話的表現活動の実践 ～『ミンたちと一緒に烟花作りを楽しむ』～

九州大谷短期大学幼児教育学科2年  
樋口・居石・松本・石橋・川津・永江・佐藤・藤原



題材とした絵本：『くまのこミンのおはなばたけ』

文：あいはらひろゆき 絵：あだちなみ  
出版社:株式会社ソニー・マガジズ  
(2005年4月9日)

### 写真①絵本

タイトル：「くまのこミンのおはなばたけ」

配役：ミン（佐藤）、ポッタ（樋口）、ホッタ（川津）、もぐら（石橋）  
ナレーション（松本）、ピアノ(居石)、カメラ(藤原)、切り替え（永江）

担当：プロデューサー（藤原）、ディレクター（永江）  
道具（居石、樋口、永江、佐藤、川津、松本、藤原、石橋）  
カメラ・音（藤原、居石）、報告書（佐藤）

### 1. 題材「くまのこミンのおはなばたけ」選定の理由

一つの絵本を選ぶ際に最も重要だと思ったのは、遊びの展開がしやすく、子どもたちも一緒に楽しむことができると思い、この絵本を選んだ。主な登場人物はミン・ポッタ・ホッタの3人で、途中もぐらが出てくるぐらいで登場人物はそんなに多くないため、3歳児の子どもたちがそれぞれの登場人物を把握しやすく絵本の内容を理解しやすいと感じた。

以上のことから私たちのテーマである「ミンたちと一緒に烟花作りを楽しむ」を3歳児に体験してもらうことに適していると考えた。

（松本）

## 2. 「くまのこミンのおはなばたけ」

この題材において、私達は子ども達に、「ミンたちと一緒にお花畑を作る」ということを楽しんでもらうために、クイズやなりきり遊びを考えた。そのため、以下の遊びを考えた。

- ・クイズ

これは、種を大きく写して、子ども達に当ててもらいクイズを楽しむ。

種を初めて見た子ども達は、色々なお花の名前を大きな声で答えてくれた。

- ・なりきり遊び

これは、自分が好きなお花になりきる事を楽しむ。

子ども達は、お花になりきる事で友達同士で見せ合い、自分はどんなお花にしたのかを話し楽しんでいる様子だった。

(樋口)

## 3.対話的表現活動で大切にしたこと

- ・子ども達に聞こえるように出来るだけ大きな声で話を進めた。
- ・道具を出すときは、一つ一つ説明をして話を進めるようにした。
- ・子ども達の声にはできるだけ反応し、沢山コミュニケーションを取ることを心掛けた。
- ・ペープサートは、ただ置いているだけではなく、ミン達が実際に話をしているように動かしながら話を進めた。
- ・時差はあったがジェスチャーを使ったり身振り手振りを大きくして分かりやすく伝えるように工夫した。

(石橋)



写真②本番の様子

## 4.内容について

### (1) 全体の構成

くまの3人兄弟である末っ子で女の子のミンが、ポッタとホッタという2人のお兄ちゃんと一緒にミンの大好きなお花畑を作るというおはなし。

まずは、ジョウロ・シャベル・バケツなどの道具を用意し、種を植える準備をしていく。準備ができれば、3人は腕まくりをして土を耕す。

次に、種・球根を植えたらジョウロでたっぷり水やりをして、それぞれ花の名前を書いた札を立てる。

あったかいお茶とクッキーを用意して、ベンチで休憩。ところが、ポッタが庭の隅にある大きな穴を発見する。ポッタ・ホッタ・ミンの3人は、穴の中がどうなっているのか想像を膨らませる。

穴の中に入ると道を見つける。どんどん道を進んでいくと扉を発見する。おばけの家かもしれないと思い、恐る恐る扉をノックしてみる。

するとそこは、もぐらさんのお家で、3人はほっとする。もぐらのママが3人にお昼ご飯をご馳走してくれ、そのあともぐらさんも3人と一緒に庭に戻り、お片付けをする。

最後に、お花が綺麗に咲くようにともぐらのママがおまじないを教えてくれた。お花畑は完成し毎日水やりをする。

そして春になると、綺麗な花が咲く。綺麗なお花が咲いた庭で、ミンたちは森の動物たちと楽しくパーティーをして楽しむ。

(松本)

### (2) 子どもたちとの対話について

絵本の話が始まる前の子どもたちとの対話では、子どもたちが物語の中にスムーズに入れるように導入として、3人がカメラを通して子どもたちと対話した。そこで、どんな遊びをすることが好きなのかについて子どもたちに問い、そこからスムーズに絵本の中身へ移れるようにした。また導入として、子どもたちはどんなお花なのか言葉では全員の意見が聞き取りにくいいため、言葉ではなく身体表現で子どもたち全員の意見を把握できるように配慮した。その際は、まずカメラに映る3人がどんな風に身体で表現するのか例を見せ、子どもたちが次どうすれば良いのか分かりやすいようにした。

お花畑作りが始まる場面では、お花畑作りに必要な道具の名前を子どもたちに問い、当ててもらおうような対話を行った。この場面での対話の工夫点として、初めは子どもたちにそれぞれ道具の名前を当ててもらって終わりだったが、道具の名前を当ててもらった後に、その道具はどんな時に使うものなのか分かりやすく短い説明を加えるようにした。

種の場面では、本物の種3種類を手に乗せてカメラで拡大し、子どもたちにどんな花が咲くのか問いかけた。この場面での対話の工夫点として、それぞれどんな季節に植えて、どんな季節に花が咲くのかの説明を入れた。また、子どもたちからいろんな意見があり、それぞれの意見に対して、「あ！惜しいね！」「似てるかも！」などと子どもたちの発言に共感するような声掛けを行った。

対話全体を通して、お互い顔を合わせた対話で、子どもたちに問いかけて、答えてほしい際に手を耳に当てて「聞いているよ！」とジェスチャーで示すような工夫もあった。子どもたちが発言している時はしっかり待ち、急かさず、子どもたち全員が発言できるよう、対話の際はゆっくり時間を使うように心掛けた。

(松本)



写真

③実際の種を写しているところ

### (3) 演出の工夫 (道具や見せ方)



写真④種の背景

- ・種を手作りして本物の種のように一つ一つ違った形や色になる様工夫した。
- ・種のように、種に線を描いた。
- ・四角の袋の色を鮮やかにし、明るい印象を与えられる様にした。
- ・同じ形の種でも、数や配置を変え、少しずつ違って見えるようにした。
- ・種の形や色は紙で表現するのがとても難しかった。



写真⑤お花の背景

- ・お花が咲いた！やったー！となるように、目を瞑ってもらう様に促し、パッと画面が変わる様にした。
- ・筆で描かずに自分達の手を使い、色んな形のお花や様々な色のお花ができるように工夫した。



写真⑥穴の中の道の背景

- ・ミンやポッタ、ホッタが穴の中の道を歩く場面で、工夫点として実際に進んでいる様に少しずつ動かした。
- ・扉は、最初は見えないので、扉のシーンが出てくるまでは隠しておいた。



写真⑦.⑧モグラの家・モグラ

- ・もぐらの家で、ご飯を食べさせてもらうので、りんごをミン、ポッタ、ホッタに食べさせ、ちゃんと食べている雰囲気を出した。
- ・もぐらは2種類作り、分かりやすいように使い分けた。



写真⑨空の背景

- ・色の濃い所と薄い所が分かるように、濃さなどを変えながら工夫して塗った。
- ・筆で塗るのではなく、スポンジで空に見えるように工夫した。
- ・空の背景を使うことが多かったため、どのシーンにも合うように、シンプルで分かりやすいようにした。



写真⑩お花

- ・「ミンのお庭にお花が咲きました」とあるが、最後に蛍光の背景を見せたかったため、このお花を作りお花が咲いたように見せた。
- ・ミンたちに被らない程度にお花を作り、沢山お花が咲いた場面で表せるように工夫した。



写真⑪ポッタ、ふるい、ジョーロ

- ・ジョウロやふるいを、見せるときは分かりやすい様、一つずつ前に出した。
- ・どれの説明をしているか分からなくなるので、ピンクの矢印でその物を指し、少しでも分かりやすくなるように工夫した。



写真⑫シャベル、バケツ、ホッタ

- ・シャベルやバケツを出すときに、見やすく分かりやすいように一つずつ出した。
- ・最初は使い方の説明をしていなかったが、3歳児に分かりやすいようにするため、どのように使うのかも一緒に伝えた。

(樋口、佐藤、川津)

#### (4) 音と音楽

穴を見つけるという場面では、不思議な雰囲気になるように音を工夫して表現した。ドアを見つけた時にはドアの存在に注目がいくように短く高い音を使った。穴の中を歩く場面では暗い中をドキドキしながら歩き、進んでいく様子を低くゆっくりとしたリズムで表した。花が咲く前は、ワクワク感を持ち待ち遠しく思えるよう高い音を使って少し早く弾くことで、楽しく明るい気持ちになれるように表現した。物語のなかで短い、同じメロディーしか使っていないが、高さや速さを変えることで場面にあった音になったと思う。

(居石)



写真⑬ピアノ

#### (5) プレ・パフォーマンスにおける子どもの姿と省察

絵本の表紙を写しているところで、机に振動が伝わり少し動いたのを子ども達が気付いて反応していた。そのため、映像であってもとても小さな変化にも反応をしっかり示してくれるのだと感じた。物語を聞いてジェスチャーを合わせてしながら楽しんでいる子どももいた。(力持ちの時など) その為、少しゆっくりと話を進めていくことによってじっくり子どもたちが物語を楽しめるのではないかと思った。画面の切り替えをもたもたしてしまうとせっかく物語に入り込んでいたのに集中力が切れてしまう為、画面を暗くするなど出来るだけ最小限にしておくべきだと感じた。物語が始まる前や問いかけが多く、子どもたちがたくさん声を発したり、反応したりしていた為、なるべく子どもに参加してもらいながら物語を進めていけるといいなと思った。

(永江)

#### (6) 取り組む過程での改善と工夫

子どもたちにどんなことを楽しんでほしいかということを考えながらストーリーを決めた。ストーリーが決まり、道具を作るときに二人一組になり、お互いに協力してできるようにした。ペープサートで、ミンの大きさに合わせてホッタやポッタを作った。画用紙だけではなく、針金、段ボールやビニールテープなどを組み合わせてより本物に見えるようにしたり、細部までこだわったりした。カメラを使って初めてリハーサルをしたときに割りばしを一本ではなく二本縦に繋げた方が粘土に刺すときが良かったり、背景の後ろに段ボールで頑丈にした方がいいことなど改善点がたくさん見つかった。役をそれぞれ決めていたが、実際にしてみると上手くいかず役を変えたり、場所を変更したりした。最初の絵本の表紙から空の背景が変わるところを絵本のページをめくっているように見せるために画面の切り替えを工夫した。

(藤原)



写真⑭⑮本番の様子

### (7) 子どもたちの様子と表現

- ・子どもたちに「どんなお花が好き？」と聞いた時に大きな声で「チューリップ」「ひまわり」という子どもの様子もあれば、子ども同士で好きな花を伝え合っている子どもたちの様子もあった。
- ・物語に入っすぐの「くまの子」という言葉にすぐく反応している様子があった。
- ・道具をクイズのようにして出していく場面で、ふるいが出てきた時に「ちゃっちゃっちゃっちゃ」とふるいを使う動作をする子どももいた。
- ・チューリップやコスモスの写真が出てきた時に口をおさえて驚く様子や「きれい」と言う様子があった。また、腕を大きく回したり体を大きく使いながら「可愛い」という様子もあった。
- ・穴を見つけた場面のあたりから静かに興味を持った感じで、集中して見ている様子があった。
- ・「ちんぷい」の時に登場人物や学生が何かを言った訳でもなく、自然と手を回して「ちんぷい」と言っていた。
- ・保育者が手紙を読み始めると興味を持つ様子がある。
- ・目を瞑る時には、手で隠す子どもや、立って楽しみにしている様子があった。
- ・お花畑へ移動した場面では「うわあ」と喜ぶ様子や、ジャンプをする様子があった。
- ・一つ一つの動作が大きかったり、声を届けようと手を使って大きい声を出したりする様子が多く見られた。

(居石)

## 5.取り組みを通して得たこと

### 【藤原】

絵本は年齢に合わせて選ぶことができた。絵本を読んでどんな遊びができるか考えたり、どんな保育ができるかを考えたりすることが少し大変だった。でも、みんな意見を出し合っているうちに考えることが楽しくなってきた。子どもたちとワイワイ楽しく見ることができたり静かに集中して見ることができたりするなど絵本によって違い、子どもたちによって選ぶことができると感じた。最初はカメラとしての役割をあまりできていない部分が多かったが、みんなでもっとこうした方が見えやすいとか分かりやすいというアドバイスをもらいながら進めた。練習を重ねるごとに改善すべきところが見つかり、それをみんなで協力して直していった。オンラインで子どもたちの反応に合わせて実践するのは難しい部分もあったが、みんな協力して行うことができたと思う。リハーサルを重ねるごとに先生方のアドバイスを受け、みんなでより良いものを作れたと思う。

### 【樋口】

幼教子ども劇場を通して、絵本選びはとても大切だと思った。話を展開しやすいような絵本を選ぶのも大切だが、子どもの年齢に合った絵本を選ぶ事が大事だと分かった。子どもは、その本を見るわけでは無いので、分かりやすいよう、一つ一つ丁寧に説明すると良いと分かった。この本は、展開するのがとても難しかったが、全員で「こうしたら？」や「こうしてみよう」等の意見を出す事が出来たと思う。最初は、うまくいかなかったが、最後にはしっかりやり遂げる事が出来たと思う。そして、子どもではなく学生の前で行うのはとても難しかったし大変だった。子ども達の反応は、園によって違うんだと知る事が出来たし、その時の質問の返しが、思っていたのと違って、ちゃんと子どもの返しに対応する事が大切だと改めて思った。今回の幼教子ども劇場を通して、子どもの反応やみんなで協力する事の大切さを改めて学ぶことが出来た。先生方に沢山アドバイスを頂き、リハーサルを沢山したのでいい作品ができたと思う。

### 【松本】

今回の幼教子ども劇場を通じて、準備段階では、それぞれ役割分担をし、効率よく準備を進めることができた。また、みんな任せにすることはなく、分からないことや困ったことがあった時はそれをみんなに共有し、みんなで解決するようにした。

プレパフォーマンス前の1回目のリハーサルでは、カメラやマイクなどの機材が使えなかったが、機材係はダンボールでデモを作り本番に備えるなど、身の回りにあるもので代用しようとする工夫があった。

プレパフォーマンスでは、たくさんの課題が見つかり、本番までの間に新たに必要なペープサートを作ったり、セリフを付け加えたり、より子どもたちが見やすく楽しめるようなカメラワークの調節を行ったりなど、グループ全体で意見を出し合いながら行うことができた。

そして、1回目の本番では、子どもたちの予想していなかった反応にもしっかり対応しながら行うことができた。2回目の本番では、前日の反省点を踏まえ、改善すべきところは改善し、始まるギリギリまでカメラで何度もペープサートの位置確認や背景・種などの写り方を丁寧に確認し、最後の本番に挑むことができた。

幼教子ども劇場で自分自身が最も気をつけたことは、ナレーションをゆっくり・はっきり行うということである。この絵本では、ナレーションが物語を進めていく

ため、その分セリフも多く、様々な場面と声の雰囲気合うように心掛けた。また、本番は練習と比べるとより緊張感が増して早口になり、ナレーションだけでなく全体も早くなってしまったため、ゆっくり・はっきりを特に意識した。

幼教子ども劇場を終えて、準備段階から自分たちも楽しく行うことができ、最後は達成感を味わうことができたのでよかったと思う。

#### 【永江】

今回使用した絵本では、絵本通りに表現したくてもそのまま表現するだけでは子どもたちが楽しめそうにない、混乱してしまうというようなところが何箇所かあって、そこをどうするのかでは悩んだが、さまざまな意見をお互いに出したり、先生の助言を参考にしながら、構成をしていけたと思った。

制作では、役割分担をして取り組んだ。効率よく出来たかといえば出来ていないのかもしれないが、互いにフォローし合いながら進めることができた。誰かの負担が大きくなりすぎると、どんどん不満が募って悪循環になってしまう為、互いに声を掛け合いながら、みんなで一緒に作っていくというような、それぞれが同じ熱量で取り組むことが大切だと思った。

切り替えと音声を担当して、実物を使った練習が中々出来ず、段ボールで代わりとなるものを作ってみんなが練習している動画を見ながら練習した。どうしても上手いかなところは手の空いている人に協力してもらいながら何とかやり遂げることが出来たと思うのでよかった。

楽しいことばかりではなかったが、題材選びから本番までやってきて、グループ内の話し合いや他のグループや先生の意見を取り入れてどんどん中身が良くなっていき良い作品が作れたのだと思った。最後まで全員で頑張れたので良かった。

#### 【居石】

今回の幼教子ども劇場を通して様々な場面で大切なことを学んだ。絵本を選ぶ時に、その絵本から子どもたちに何を知ってもらうか、何を楽しんでもらうかなどその絵本からできる活動を考えることは楽しいと思うとともに難しいと感じた。年齢によって子どもたちの感じ方が違うということを入れて考えていくと考えが広まらないことがあったが、グループのみんなと考えることでより良い活動を考えることが出来た。そのことからグループで協力し、考えを深めることが大切だと改めて学んだ。活動の中で使うものを作る時には、どうしたら子どもが楽しみながら参加できるのか、見やすくするためにはどうしたらいいかなど見る方からの視線を大切に考えた。また、ただ見て終わらず興味を持ってもらうにはどうしたらいいかを深く考えることが出来た。リハーサルで上手いかなかったことを動画を見て振り返り、次に繋げるために話し合いをするなど、ただ行って終わりではなく、振り返ること、子どもの様子、反応を見ることなど行った後が大切だと学んだ。グループで話し合ったり先生からアドバイスをもらい、リハーサル、本番と数を重ねることにより良くなったと思う。

#### 【川津】

幼教子ども劇場を通して、年齢に合った絵本を選ぶことが大切だと改めて思った。また、絵本の内容をそのまま使うのではなく、子どもたちが楽しめる内容にするために、自分たちで考えた内容を付け加え、少し内容を変える工夫もしていくことが大切だと分かった。

準備では、みんなで役割分担をして、作業に取り組むことが出来た。ペープサートを使って演出をする上で、画面にしっかり映っているのか、隣の物と被っていないのか、出したり、取ったりするタイミングは合っているのか、などが難しかった。

た。練習やリハーサルを積み重ねていくうちに、出すタイミングや、セリフを言うタイミングなどを掴んでくることが出来た。プレパフォーマンスやリハーサルなどを通して、どうしたら良い作品になるのか、良くした方がいい所などを先生からアドバイスをもらって改善していく中でより良い作品になっていったと思う。

画面を通してではあるが、子どもたちの反応を実際に見て楽しんでくれている様子が伝わってきたので良かった。準備など大変なことも多かったが、みんなで、意見を出し合いながら、子どもたちに楽しんでもらえる作品を作ることが出来たので良かった。幼教子ども劇場を通して、たくさんのことを学ぶことが出来た。

#### 【佐藤】

今回の幼教子ども劇場を通して、子どもたちと関わることの楽しさを改めて感じることができた。まず準備の段階では、各担当に分かれて制作に取り組むことが出来た。制作が早く終わった所は、終わっていない部分を手分けすることで協力して作業することが出来たと思う。また、最後の花畑の背景では、一人一人が手形でお花を作り、色鮮やかで良かった。空の背景も、ただ筆で塗るだけではなくスポンジを使って塗ったことで細かい部分まで工夫することが出来た。

練習では、ペープサートを出す部分や自分のセリフの確認、場面が変わるときの背景の移動のタイミングなど、みんなで確認し合っていることが出来た。話し合いでは、まとまったことも実際に行ってみると上手くいかないことがあったが、各役割に責任を持って取り組むことが出来た。

本番では、実際に子どもたちとの受け答えをするということで緊張や不安もあったが、楽しんで行うことが出来た。予想外の反応をしてくれる子どももいて、子どもの発想力のすごさを感じた。最後のお花畑が出来た場面では、子どもたちの反応がとても可愛くて、幼教子ども劇場に取り組む事が出来良かったと感じた。

#### 【石橋】

今回の幼教子ども劇場を通じて、改めて協力することの大切さや素晴らしさを実感した。グループ全体でどのような内容にするのか、また子どもたちが楽しく見てもらうにはどんな工夫が必要なのかなどのたくさんの試行錯誤をしたのでここまで作品を作り上げることが出来たと思う。また8人のグループメンバーがいたので一人一人が持つ意見を出し合って何度も話し合いを重ねた。準備段階で自分の持ち場の仕事が終わったら終わっていない人の手伝いを行い、次の作業に進みやすいように準備するなど、周りの人たちが次のことまで考えてをしてくれてたので、大変スムーズに進めることが出来た。

子どもたちに実際にやってみると、それぞれの園の子どもによって反応が違ったり、花の名前を答えるのが自分たちが思っていたものと違っていたり、「その花の名前を知ってるんだ。」と驚く事もたくさんあった。なにより子どもたちが笑顔で劇を見てくれた事や反応してくれたところ、楽しそうに見てくれている様子が見れたので成功したのかなと思えたし、幼教子ども劇場をやってよかったなと感じた。子どもたちの様子を見て学ぶこともたくさんあり、子どもたちに劇を見せるまでの作業段階や準備段階でもたくさん学ぶことがあったので、吸収した事を就職後の保育活動の中で活かしていきたいなと思った。